

2009年8月16日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 8章 1～22 節

説教題：さばく王を与えてください

1 エリとサムエル：子育ての問題

サムエルは、幼いときに祭司エリの元に預けられ、そこで育てられたという経歴もっています。そのエリには成人したふたりの息子がいて、エリと同じように祭司として働いていました。しかし彼らは、よこしまな者であって、悪事の限りを尽くしていました。エリは一度息子たちに注意を与えるのですが、改めようとしません。

そのことで、あるとき、まだ少年であったサムエルは、神がお語りになった厳しい言葉を聞くことになりました。「エリのふたりの息子たちを戒めなかったので、エリの家を永遠にさばく。」やがて、ペリシテ人との戦いがあった時、ふたりの息子たちは、主が語られたとおりに死んでしまうのです。

サムエルは少年時代に、このような神のさばきを身近に経験しておりました。自分がやがて父親になるとき、絶対にこんな失敗をしてはならない。エリの家のことを教訓としてはっきりと胸に刻んだはずです。

そんな事情を知っている私たちは、今朝の箇所を読んでとまどってしまいます。あのサムエルが、エリと同じ事を繰り返しているからです。

サムエルのふたりの息子、ヨエルとアビヤは、ベエルシェバというイスラエルの南の端にある名の知れた町のさばきつかさとなっていました。今で言えば、町の政治的な指導者であり、また裁判所の裁判官のような立場であったと考えられます。そのような重要な

立場にありながら、利得を追い求め、わいろを取り、さばきを曲げていました。このふたりの息子たちはやってはならないことを平然とやっていました。

ここで私たちはとまどいます。エリは、自分の息子たちのことで厳しく責められました。ところがサムエルは違う。むしろ、神はいつもサムエルに対して好意的でさえあります。それはどうしてなのか。これから見て参ります。

2 長老たちとサムエル

あるときイスラエルの長老たちが、サムエルにこんな事を告げました。5 節。「今や、あなたはお年を召され、あなたのご子息たちは、あなたの道を歩みません。どうか今、他のすべての国民のように、私たちがさばく王を立ててください。」

私がおもひサムエルならば、長老たちのことを聞いて、二つのことでカチンと来るでしょう。一つめは「あなたはお年を召された。」高齢になったのでそろそろ引退したらどうか。引退勧告です。自分はまだまだだと思っていたのに、役立たずと言われたようでショックです。

そして二つめ。息子たちが悪いことをして、みんな大変な迷惑を被っている。例え事実はそのようであったとしても、あなたは親として失格だと言われたような気がして穏やかな気持ちではいられなくなる。

サムエルは若いときに、主の預言者に任じ

られました。自分の計画とか自分の願いでそうなったではありません。あくまでも主がサムエルをイスラエルの預言者、あるいは祭司として立てました。自分が立つのも倒れるのもすべて神のみこころによることであることを知ってはいます。

しかし、そうは言ってもサムエルも人間です。長老たちから引退勧告を突きつけられたことで、すっかり自信を失ってしまう。その上、息子たちの悪事の顔を面と向かって指摘されて、言い訳もできません。

私たちは、サムエルのように時々人から責められるようなことを経験します。自分では一生懸命やったつもりだけれども、どうしてもうまくいかなくて、みんなに迷惑をかけてしまうこともあります。そんなことを繰り返していると、自分を責め続けるようになります。「おまえは結局だめな人間だ。おまえは能力がないのだ。おまえは神の前に赦されるような人間ではない。」自分を責めることが繰り返し聞こえてきて、苦しくなることがあります。おそらくサムエルもそんなふうになってしまったのではないかと思います。

3 神とサムエル

(1) 神の励まし

そんなサムエルに対し、神はこんなことばをおかけになるのです。「それはあなたを退けたのではなく、彼らを治めているこのわたしを退けたのであるから。」

神はサムエルといつしよにおられます。神はサムエルの苦しみを背負おうとされています。あなたが苦しむ必要はない。わたしがすべての責任を負うのだから、わたしにまかせなさい。あなたはこれ以上悩むことはない。神は、すべての責任を引き受けられ、サムエ

ルを慰め、励まそうとされます。

(2) エリの悔い改めから学んだサムエル

しかしそうは言われても疑問は消えません。エリは、息子たちのことで神から厳しく問われましたのに、サムエルはそうではない。どうしてなのか。

かつてのエリの生き方を思い出していただきたい。エリは祭司でありながら、ずっと神の救いのことを知りませんでした。だから、自分の弱さ、自分の至らなさを神に申し上げるというようなことは考えたこともなかった。しかし、少年サムエルの口を通して神のさばきの御言葉を聞かされたとき、初めてエリは告白しました。「その方は主だ。主がみこころにかなうことをなさいますように。」自分はさばかれても仕方がない、弱い父親である。力のない祭司であると、主に申し上げたのです。エリが神の前に碎かれ、悔いていく姿をサムエルは自分の目で目撃していきます。悔いる者に対して、神がどれほどにあわれみ深いお方であるのか、サムエルはエリを通して徹底的に学んでいきました。

そんなサムエルは、息子たちがさばきを曲げていることを、神に対して何も申し上げないはずはありません。エリのことが頭に鮮明に残っています。自分もエリと同じなのだという思いを強くしたはずです。当然、父親として残念に思いながら正直に神に申し上げてくはずです。

主が、サムエルの息子のことでとがめ立てをしないのは、そのためです。主は、サムエルを責めるのではなく、むしろサムエルの弱さに寄り添い、心を痛めているサムエルを励まそうとされます。神はサムエルの味方として立ち続けようとされます。

4 神

(1) 悔いる者の味方とされる神

しかし、まだ疑問が残る。サムエルは高齢になった。息子たちは悪いことをしている。そうしたら当然、だれだってどうしたらいいのか考えるはずではないか。長老たちはまともなことを提案している。それなのに、神は長老たちの考えを厳しく責め、サムエルの肩ばかり持とうとするのは不公平ではないか。

神がサムエルの味方とされる、二つの確かな理由があります。

一つは、今申し上げたように、神は悔いる者を絶対に捨て置かない、そのようなお方だから。息子たちが悪事をはたらいていても、味方だということか？答は、イエスです。そのように聞いて驚くかもしれません。もう一度申し上げます。どんな理由であれ、神は悔いる者の心を大切に扱われるお方なのです。悔いる者のために、いつも味方になって責任をとろうとするお方なのです。

納得できないでしょうか。でもよく考えたら、私たちは人をさばく資格があるのでしょうか。自分をふり返ってみたらどうですか。息子娘たちを正しく育てたという自信がありますか。自分はいつも完璧で絶対に間違いはしない。そう言えるのですか。神の前にそんな人は一人もいないのです。だからパウロが言うのです。ローマ人への手紙2章1節。「ですから、すべて他人をさばく人よ。あなたに弁解の余地はありません。あなたは、他人をさばくことによって、自分自身を罪に定めています。さばくあなたが、それと同じことを行っているからです。」

私たちは、サムエルの弱さを責めることはできません。サムエルの弱さを責める前に、神がサムエルの弱さを赦し、味方となってく

ださっていることがどれだけ私たちにとって慰めになるのか、そのことに目を留めていただきたい。私たちの常識に照らせば不公平に思えるくらいに、神は悲しむ者、悔いる者の味方とされるのです。

(2) 罪を見破る神

神がサムエルの味方とされる二つめの理由。長老たちは一見もつともな理由を申し述べて、王さまを立ててくださいと要求してきました。しかし、神は長老たちの動機を見破っておられます。長老たちの本音は20節にはっきりと示されています。「王が私たちの先に立って出陣し、私たちの戦いを戦ってくれるでしょう。」

確かにペリシテ人との緊張状態が続いていました。いつ大きな戦争になるのか、そのことにおびえていました。長老たちは、そのことを心配していました。

前回、7章を見ていったとき、イスラエルの人々が、「私たちは主に対して罪を犯しました」と告白したことを覚えておられるでしょうか。ペリシテ人の戦いになったときも、サムエルに願いました。「私たちの神、主に叫ぶのをやめないでください。」戦争という厳しい状況にあるときは、まるで苦しいときの神頼みのようにして主に叫んでいました。かつてイスラエルの人々は心から真剣に神により頼んだときがあったのです。その結果、ペリシテ人との戦いに勝つことができた。神がイスラエルに平和を与えてくれた。実際にそんな経験をしていました。

ところが、日が経つうちにそんなことを忘れていきます。他の国もやっているように、王さまを立てて、王さまの指揮の下で戦争を戦うべきではないか。イスラエルの安全保障

を確かなものとするために、指揮官である王を立て、軍隊を整備すべきである。それが長老たちの考えでした。

それに対し、神は言われます。「彼らのしたことといえば、わたしを捨てて、ほかの神々に仕えたことだった。そのように彼らは、あなたにもしているのだ。」

神がサムエルの味方である理由がここにあります。国の防衛のためだ。国家安全保障のためだと、たいそうなことを言っている長老たちが、じつは神を退けるという大きな罪を犯していたのです。

(3) あわれみの神

ところが不思議なことに神はこう言われます。「罪を犯している民たちの声を聞き入れなさい。」神は明らかに長老たちの罪を知っておられるのに、このように言われる。そればかりではない。あなたがた王さまを立てるとすると、王さまはこんなことをあなた方に要求しますよと、詳しく懇切丁寧に説明さえするのです。「あなたがたは王の奴隷となってしまう。きっとあなたがたは、苦しくなって助けを呼ぶようになるけれど、主は答えてくださらないけれども、それでもよいのか。」

イスラエルの歴史始まった以来初めて王様という政治体制が敷かれていきます。今まで経験したことのないシステムです。サムエルは忍耐強く新しい政治体制のことを説明する。こんなことになるけれどもいいのかと念を押します。罪を犯すイスラエルに対して、神は忍耐をされています。

19節。「それでも民は、サムエルの言うことを聞こうとしなかった。いや、どうしても、私たちの上には王がいなくてはなりません。」

ん。」

神を退けるという罪に気がつかず、強情に人間の知恵を追い求めていく長老たち。それでも、神はそんなイスラエルを見捨てようとはしません。神はイスラエルにやがてひとりの王をお立てになっていかれます。神を捨てて、人間に頼るべきだという思いから始まったこの計画。驚くべきことに、神はそんな人間の浅はかな計画を拒絶するのではなく、受け入れていきます。

神が妥協したわけではありません。長老たちの罪によって神の計画が妨げられるようなことは全くありません。人間が神を退けようとしたとしても、神の救いの計画は着実に為し遂げられていきます。その計画は、やがて神のひとり子イエス・キリストがイスラエルの王となられ、私たちのところに遣わされて来たことによって、成し遂げられていきました。

5 悪をかかえている私たち

昨日8月15日は敗戦記念日でした。かつて日本は、他の国に侵略し、人の命を奪い、物資を奪い、あらゆるものを破壊していった歴史をもっています。テレビでは特集番組が放送されていました。戦争に兵士としてかり出されたことのある人たちが重い口を開き、戦場での体験を証言をされていました。戦場から無事に帰ってきた人たちが、重い罪責感をかかえてその後の人生を送らなければならなかったことを知り、考えさせられました。「自分はほかの人を押しつけて、我先にと列車や船に無理矢理乗り込み、食べ物を奪い取り、それで生きて戻れた。生きて戻った人たちは、悪をかかえながら生きてきたのではないか。」そんなことを告白された方も

いました。

イスラエルは、やがて王さまを立て、戦争の準備に取りかかっています。多くの人々が戦いで命を落としていきます。人の罪がどれほどに深いものであるかを覚えます。

箴言に「主を恐れることは知識の初めである」とあります。

歴史をふり返れば、人間の力により頼む者がどのような結末を迎えていくのか、私たちはいやというほど経験しています。もう一度、神のみ思いを覚えたいと願います。主を恐れることの恵みの深さを味わいたいと願われます。

主イエス・キリストはどこに立っておられるのでしょうか。この方は力を振りかざすことはありません。この方は、ご自分の能力を誇ることはありません。むしろ、十字架の上で最も弱くなられたお姿を私たちに示してくださっています。主のお姿の中に神のあわれみの豊かさを見たいと思います。